変態科学者はゲームオーバーを公爵令嬢に捧ぐ

KAMATAMA

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

キチ眼鏡と呼ばれたネタキャラ噛ませ犬の天才科学者は、この世界がゲームである事を知った。

あらゆるルートにおいて、必ず正義に殺される悪の帝国陣営の令嬢を救う為に、ゲームのシナリオに反逆する。

主人公が救う民衆全てを不幸にするとしても、ゲームオーバーをただ一人を幸せにする為だけに捧げよう。

これは変態の変態による令嬢の為の冒涜劇である。

目次

リスタートはゲームオーバーに向けて
1
帝国の四天王 ―――― 12
四天王最賢は、四天王最堅に弟子入りする ―――― 25
彼女に捧ぐ誓い ―――― 37
モンスター名…盗賊　種族…人間　役割…試験課題 ―――― 48
朴念仁とラブコメはシナリオの変化を示す？ ―――― 67
悪役公爵令嬢と悪役貧困聖女 ―――― 75

リスタートはゲームオーバーに向けて

互いに譲れぬものを賭けて、二人の青年が対峙する。
「主人公くん、君には悪いですがここでゲームオーバーです」
一方は、決して少なくない血を流しつつも、育ちの良い微笑を絶やさない貴公子。
悪いと言いながらも、欠片も罪悪感があるようには見えない。
割れた眼鏡越しに、優しそうにさえ見えるが温度の無い視線を向ける。
彼は生まれも育ちも全てを与えられて生きてきた。
過剰な程に高水準の素質に、それを存分に活かす環境。
望めばおおよそのものは、与えられる事も自ら掴むことも出来た。
それでも、それら全てを捨ててでも己の望みを求めた。
「俺たちは帝国の支配を壊す。
俺たちはハッピーエンド（みんなの幸せ）を手に入れる。
お前なんかに、みんなの幸せを壊されてたまるかっ!!」
もう一方は、全身から熱意を可視化させるが如き情熱を溢れさせる泥臭い英雄。
彼は生まれも育ちも決して恵まれてはいなかった。

それでも誰もが恵まれる世界の結末を信じて、ここまで積み上げてきた。
既存の支配者が独占する権益を、全ての恵まれない人に平等に分配する為に。

眼鏡の青年は微笑みを浮かべているが、その内面は完全に冷え切っている。
みんなの幸せ。
貴公子はその言葉を実にくだらないと、表情を変えるどころか、思考の端にすら乗せず切り捨てる。
狂える科学者にとって、そんなものに全く価値はない。
その中に彼女がいなければ、それ以外の幸せになど何の意味もない。
ただ彼女さえ幸せなら、他の有象無象の幸せなどどうでもいい。
世界の幸せの総和が決まっているのなら、目の前にいる男が恵まれない人々に与えようとする全ての幸せを、正当に奪い取ってでも、その幸せの尽くをあの公爵令嬢に捧げよう。
だから――――
「ここで強制終了です。
約束された彼女の死（ゲームクリアの前提事項）は認めるわけにはいきません。
では、神の身許（アディオス）へ」

色付く前の世界の法則に形を与えた、世界というキャンバスに描かれる一切の色を否定するかの様に、ただただ透き通る大鎌を民衆(主人公)の希望に向けて科学者は構えた。
「何度繰り返したとしても、何度でも支配は打ち砕かれ、何度でも自由と平和を全ての人が分かち合う世界を迎えるべきだ。
中ボス風情(クソ眼鏡)が邪魔するな!!」
あらゆる命を肯定するように多様な光により虹色に輝く正義の剣を、噛ませ犬でしかない踏み台に向けて主人公は構えた。
残像すら置き去りにして互いに駆け出し、寸分違わず同時に振られた刃が衝突する。
一合の衝突で互いの刃は領域の果てへ消し飛んだ。
だが、再び彼方より此方へと呼び込んだ刃を鏡写しのように重ね合う。
「君が存在するから彼女(メル)が幸せになれない。だから――――」「お前が存在するから皆が幸せになれない。だから――――」
「これで終わりだっっっっ!!!!!!」

これは、存在しないはずの時間軸。
これは、メモリーにないストーリー。
これは、ありえてはならぬバグ。

これは――――

――――――――――・・now, loading

・・・・・unsuccess. error loading memory.

error code 1―0VE

――――reload by safemode.

6―7th layer disable.

security unavailable.

1―5th layer warning.

Si淡・・世・ヲ・・・a・鉈・・2

request all delete（y／n）

人は誰もが幸せになるべきだと思いますか？

はい　↓いいえ
いいえ　が選ばれました。
英雄の剣戟をもって切り裂かれた学者風の男がその生を終えた。
画面(世界)は黒へと沈んだ。

人は誰もが幸せになるべきだと思いますか？
はい　↓いいえ
いいえ　が選ばれました
麗しき少女から放たれた風の鋭糸により学者風の男がその生を終えた。
画面(世界)は黒へと沈んだ。
人は誰もが幸せになるべきだと思いますか？
はい　↓いいえ
いいえ　が選ばれました。
希獣の爪が臓腑を穿ち学者風の男がその生を終えた。
画面(世界)は黒へと沈んだ。

――――――――――――――

――――――――

――――

何周目か、それとも何百周目かの世界。
選択肢は何者かに歪められた。
彼女は幸せになるべきだと思いますか？
↓いいえ　いいえ
はい　が選ばれました。
――世界は白く流転した…。

これはただ、悪役（科学者）が悪役（令嬢）を幸せにする為だけの物語。
『変態科学者はゲームオーバーを悪役令嬢に捧ぐ』

整った顔付きの学者風の男がその生を終える。
剣の一振り、槍の一突き、矢の一射、獣の爪、炎・風刃などの魔法の発動。
おおよそ起こり得るあらゆる事象をもって男は――――殺されて殺されて殺されて殺されて殺されて殺されて殺されて殺されて殺されて殺されて殺されて殺されて殺されて殺されて殺されて殺されて殺された――――
まるで映画のように、実体験を他人事の様に見せられる。
勿論映画とは違い、痛みも苦しみもそこには存在した。
それでも男は笑う。
そのようなことは、その程度の事は些事だと狂笑する。嘲笑する――――
「はっ、ははははは。はははははははは。
結構、実に結構。
私としたことが、――――実に素晴らしく救えない」
――――他でもない自身の力不足を。
膝を付き、知性を宿した端正な顔を歪めるほど強く左手で抑えながら、それまでの周回における己を追憶し、誰もいない研究室で凶笑する男、グラスリート・オフステイン。
彼はゲーム『ハッピークエスト』で中ボスを務めるキャラクターだ。

彼は虚像の底に没む世界を探求する魔導の徒。

実家の書庫に眠った一冊の本から始まった外法の研究により、一度当主である父親に糾弾され、名門ブドー公爵家を廃嫡されながらも、知性と実力により敵組織の幹部である帝国四天王の一角に上り詰めた傑物。しかし変態。

生まれ持っての天才にして、努力を否定しない秀才にして、どうしようもない変態。

ゲーム通りに魔導実験に失敗した彼は、剥がれた世界の原核にかすめるように触れたことで、幾度となく殺される己の終焉とその後の流れを何百周分も一瞬で理解した。

その結果、この世界が『ハッピークエスト』と呼ばれる物語の一種に編纂されている事も、彼は朧気には理解した。

常人ならば記憶野がパンクして廃人になっていただろう。

しかし、性格は悪い意味で破綻しているものの、優れ過ぎたという意味で破綻している頭脳はそれを可能にしたのだ。

「これが私の求めた剥がした先にある真理の裾。素晴らしい、実に素晴らしいっ!!

私の目的、使命、倫理、人生、存在理由の全て。

実に、実に――――どうでもいい」

笑みから一変した真顔で、彼はそう吐き捨てた。
結局彼が知ったのは、どの周においても志半ばで彼は殺されること。
己の命が絶え、己の探求が朽ちる。

そんなのは、どうでもいいことだった。
何百回も己の人生を繰り返せば、人生は十分に堪能出来たと言えるし、そこまでやってどの己も真理へと辿り着けなかったなら諦めも付く。
それでも諦めきれるかといえば未練はある。
世界を解き明かすのは、至高の絶頂を再体験する経緯を準備するに等しい行為であった。
しかし、少なくとも己が必ず殺されることは、気にすべき要素では無かった。
元より研究の為に悪魔に魂を売った身。
己の死など大して気にする由もない。
彼が認められないことは――唯一。
ゲームがクリアされるまでには、同じ四天王の公爵令嬢（幼馴染）も確実に死ぬこと。
幼馴染であり同じ四天王の『神速の黄金華』メルセデス・フォーミュラは、このゲームではどうやっても死が確定していた。

「大事な…大事なスポンサー様ですからねぇ。
死なれると嫌なんですよ。とても」
自分さえも騙す様にそう嘯く。
まるで彼女はスポンサー以外の何でもないと、そう諦観するように。
己の始まりの誓約に蓋をしたまま、それでも目的だけは誓いを始めた自分に還してみせる。
真理の探求が潰えた事は認めるとしよう。
己の死が避けられぬ事も認めるとしよう。
だが、彼女が必ず死ぬ運命であるなどと、到底認められるはずがない。
ゲームがどのようなプレイをされて、どのようなルートで、どのようなエンディングを迎えても、必ず彼女は死ぬ。
そんなこと、認めていいはずがない。
諦めていいはずがない。
きっと見落としがあるだけだ。
彼女を生き残らせるエンディングを作れるはずだ。
代入出来る数式が、見落した変数が、検証されていない事象が、凡人には思い付かない解答が世界に潜んでいるだけだ。

どうやっても助ける事が出来ないなんてのは、困難な計算を諦めた無能の言い訳だ。
誰よりも優れた他ならぬ天才の頭脳なら、彼女だけでも助かる未来を導き出せるはずだ。
世界を解き明かせ、在らぬ虚像に形を迎え、あり得ぬ答に到達せよ。
されば方程式はそこにあらん。
「ははは、ははははは、はははははははははっっ!!!!
そう、私は――――大帝国四天王最賢の男、界曝のグラスリート。
私に明かせない結末（解答）など存在しないっ!!」
正気をかなぐり捨て、狂気に泥を塗り、中ボス（噛ませ犬）はゲーム（世界）のシナリオ（の定めた運命）に喧嘩を売った。

帝国の四天王

この世界は、ゲームの世界である。
より正確に言うと、昔に作られたゲームのリメイク版の世界である。
この世界のシナリオを簡単に説明すると、よくあるファンタジーで、剣と魔法で悪の独裁帝国を滅ぼす勇者の物語だ。
しかし、リメイク版から追加された要素によって、悪の帝国というには、敵達が妙に倒しづらくなっていた。
癒しの聖女リキュア・ストラーダ
忠義の騎士ガンブ・レイド
神速の黄金華メルセデス・フォーミュラ
そして皇帝ヘリオス
彼ら彼女らは揃って人格者であり、名統治者であり、主人公達を脅かす勢力でさえなければ尊敬にさえ値すると、原作のゲームでさえも主人公達は言っていた。
倒しづらいといっても、結局倒すことになる。
聖女と騎士以外はどうやっても死ぬことになっている。

皇帝とその妻になるべき公爵令嬢は、必ず死ななければならない。
そうしなければ、旧き帝国の正当性を破壊して、新たな民主主義を正当化出来ないからだ。
リメイク前では、昭和当時の反支配、反権力の日本の情勢からして、独裁者は悪、民主政治こそ正義という一種のアレルギーが強かった時代に作られた為、悪役とする為の要素が帝国主義というだけで十分な時代に作られた作品だった為、帝国の支配層というだけで悪役扱いとしてのキャラは立っていた。
それがリメイク版では、戦争においてどちらが正義で悪かでは無く、どちらにも正義があるという時代に合わせて敵キャラクターに深みを付けた結果、あくまで主人公とは陣営が違うだけの人々という扱いになっている。
それ故に、リメイク前では殺さないといけなかった敵も生かしたままエンディングが迎えられる仕様となった。
尤も、メルセデスと皇帝だけは存在そのものが格差主義肯定の象徴であり、原作においてはどうプレイしようが、向けられる死は必然となる。
帝国の安寧を司る聖女、帝国の防衛力を司る騎士については、温情が向けられることがあろうと、帝国の経済を司る令嬢と、全責任を負う皇帝は、弱者を助け強者を粉砕する英雄と、彼を後押しする民衆によって斃される。

あとついでのように、救いようのないキチガイ眼鏡も、当然の如く助からない。
世界がどのように動いても、狂える賢者と、帝国皇帝と、絢爛たる令嬢は必ず滅ぼされる。
ゲームの主人公がどのような行動を取ったとしても、彼らが生きたままエンディングになることはない。
皇帝、貴族と平民が別れている以上、彼らに己の為に支配による搾取を行う面が全く無いとは言えないだろう。
それを問答無用で悪と断ずるかはこの際置いておくとしても、格差ははっきりと存在している。
帝国の仕組みの中では、持つ資産だけでなく、人権も命の重さも不平等ではある。
苛烈な競争主義と、その勝利と敗北の蓄積による階層社会を帝国は肯定していた。
それでも、彼らは国家と国民を愛していた。
その中でも特に身近な人々を愛していた。
あくまで民衆主権国家である主人公の国に対して、己の国の為に戦争をしていた敵というだけだった。
それでも、反権力闘争の昭和時代に作られたなごりを持つゲームにおいては、格差と支配を肯定する存在は、生存を許されなかった。

孤児院の運営者の一人であり、法と秩序を旨とする、皇帝への想いだけで何度も再生する聖女。

皇帝個人への忠義と、帝国の安寧と平穏な民の日常に滅私奉公する、主人公の兄の仇である騎士。

国是を象徴するように、生産を期待せず貧者に手を差し伸べる事は惜しむも、生産を期待して前に進む手段を与える事は惜しまない高貴な令嬢。

そして、帝国を含まない世界の半分を犠牲にしてでも、残された者を守り抜く意志の元に指揮を振るい、最期には愛を口にして己さえも犠牲にして散る皇帝。

そんな崇高な彼らとは一線を画した、普通に悪党であり、倒す事に唯一躊躇しなくていい四天王の一人。

シナリオと容量の都合上、初版でもリメイク版でもそれほど変わらない悪役であった男。

それがグラスリート・オフステイン。

通称：キチ眼鏡。

魔導の名門に生まれ、あらゆる才と環境に恵まれつつも、真理を研究すること以外に

一切興味が無く、家を捨てて、倫理を捨てて、名誉を捨て、想いを捨て、最後には世界とそこに住まう人々の命すら捨てようとしたマッドサイエンティスト。

彼のＢＧＭである『Ｙｅｓ真理Ｎｏ倫理』も、妙にハイテンションで、他の四天王のクラシカルなＢＧＭとは一人だけズレていて、三味線ユーロビートになっている。

人の命や想いや繋がりを軽視して、真理の探求だけを求めた挙げ句、彼はパターンによっては皇帝直々に討たれる。

彼の研究は、当初は帝国を含む世界の半分を残す為に必要であり、その為に皇帝に必要とされて四天王の地位を与えられた。

最終的にはその研究成果の一部から偶然発見された理論と、愛と勇気とご都合主義によって主人公によって、帝国以外の全てが平穏無事に終わる。

要するに、グラスリート・オフステインはただの踏み台の敵である。

リメイク版においては、敵の一般兵士さえ家庭があり、友人がいて、その為に戦う事に誇りを持ちながら、他国を犠牲にすることに苦悩しつつ、それでも尚戦う描写が散見されるこのゲームにおいて、このキチ眼鏡野郎だけはそういったものがない。

「見せてあげましょう。我が研究の成果を!!」

「ははは、はははは、はははははは、改めてこのグラスリート様の天才具合を理解

し直したところです。」
「この天才に楯突くとはつくづく学習力が足りませんねえ」
「世界を解き明かす糧にされる事に感謝しても良いのですよ」
「…死んでしまったのですね。私の、私のスポンサー様が。
――――――さて、研究をどう続けましょうか」
「愛？　不要不要不要!!　世界など人の命など感情などという脳内物質の作用など、所詮は私の実験材料に過ぎません」

基本的にマッドサイエンティストなクズであり、同じ四天王であるメルセデスを殺されても、スポンサーとしか思っていなかったと嗤う。
逆に彼の幼馴染みであるメルセデスの方は、グラスリートが先に倒されると、こんなクズの為にさえショックを受けた様子がある。
いつも通り優雅に、一人欠けたテーブルについて、空のティーカップに唇を付ける様子に、聖女と騎士がいたたまれない様に視線を逸らす程だ。
メルセデスは紅茶をグラスリートに入れさせる場面が多かっただけに、その印象は強い。
そんな善人染みた敵の中で唯一、普通にクズ野郎な眼鏡。

それがグラスリートである。
因みに愛を不要と言う最後のセリフは、その発言の直後に「愛無き理想に未来は非ず」と断じた皇帝に愛を以って殺されるパターンのものだ。
恵まれたスペックにありながら、人格が歪み過ぎていたために、必ず死ぬ（世界に愛されなかった）男。
噛ませ犬で踏み台の中ボスであり、誰もに蔑まれた男。
それがグラスリート・ステインオフ。

グラスリートは夢のような世界で、何百回も自分が死んで、メルセデスも死ぬまでの過程を見続けた。
常にグラスリートがメルセデスの後に死ぬわけでも無い。
それなのに、己の死後もメルセデスの死までは周回は続き、そして巻き戻っていた。
何故グラスリートが死んだところで終わりではなくて、いつもメルセデスが亡くなるところまで見せられるのかは彼にはわからない。
――いや、わかっていた。
「くくくっく、ふはははは、はははははは。

これがそうなのですよ。
ははははは、これが、これがそうなんですよ、皇帝陛下。
此度は貴方に殺されなくて良さそうだ。
別に殺された事そのものを恨んだ事は、一度も無かったのですけどね。
何せ、彼女を幸せに出来るとしたら貴方だけだ」

今まで己さえも瞞すように隠してきた想い。
しかしこれだけ愛する女性の滅びを見せつけられた後では、その欺瞞にもほころびが出ようもの。
誰にも知られたくは無いが、それでも愛している。
だから、己以上に彼女の幸せに最適解である皇帝を宛がう。
その方針は結局の所変わらなかった。
人の気持ちを考えることは出来ても、人の思いを汲み取る事が出来ない変態眼鏡は、どこまでも変態眼鏡でしか無かった。
この世界（ゲーム）で唯一、誰も愛することなく生きて死んだとされた男は、一瞬で何千年分も見せられた情報を処理し終えて、一番最初（ブ）の大失敗（ド）直後（家）には見せることの無かった、無（放）垢（逐）さの欠片さえない表情で奔笑した。

己の頭脳であれば、愛しか無い理想からでさえ、未来は見通せるはずだと。
科学者は狂笑しながらも冷静に、主観的に時が巻き戻ったと感じた己が、今はどの時間軸（シークエンス）にいるのかを確認する。
「未来の記憶（幾重の過去）が正しければ、この時点で『色剥がし』に成功してしまった私は、この後に家臣に追求された父上に追放されてしまう訳ですが、いやはや世知辛いものです」
これまでの記憶に寄れば、自身がこの後廃嫡されるというのに、男に不安は見られない。
当たり前の事だった。
自身が家族に捨てられることさえ、彼にとっては些事である。
世界に切り捨てられることが確定した女性に比べれば、些事というのも烏滸がましいと、己も同じく世界に切り捨てられる身でありながら断定する。
それに、今までの全ての周回において、必ず彼のスポンサーが手を差し伸べてくれるからだ。
いや、彼女は無条件に手を差し伸べたりをする様な女性ではない。
メルセデスは国是の象徴。
その意思を促し、その手段を与えるだけ。

彼の研究を活用したい新皇帝へ、繋ぎを作るだけだ。
とはいえ結局その後は、グラスリートの研究に何かしらの理由を付けて支援してくれる。
それすら、国母候補たる彼女の立場からすれば本来許されない行為ではあるのだが、それでもメルセデスがそれを止める事はない。
嘗てのグラスリートの婚約者であり、それが無くなった後は皇帝の婚約者候補になったメルセデスは、本来ならばブドー家との関係においても、皇帝の后候補としても、追放されたグラスリートとの繋がりがあっては良くないのだから。
グラスリートは考える。
今までに同じ人生をやり直してきた事には気が付かなかった。
何故今回に限ってなのだろうか？
あの回想はなんだったのか？
もしやあれらは全て別の平行世界の記憶なのかも知れない。
しかし、そんな事はどうでも良い事だった。
「今回こそ生き延びられる――そんな甘い見通しはありませんね。
だからこそ、だからこそ今回望むことは一つだけでいい。
彼女を救えるのなら、それでいい」

その感情自体は元々彼には存在しなかった訳では無い。
しかし、敵である主人公にも、上司である皇帝にもゲーム中の描写にさえ、『無い』と判断された感情だった。
…最後まで照れ隠しをするに充分な研究への狂気は、今回は更に歪んでいた。

「まずはこの後に訪れる廃嫡イベントですか。
時間の浪費は、目的に遠ざかるに等しい。
自分から申し出て、サクサク進めましょう」
自分の家を捨てる事にさえ躊躇がない。
そんな所を見ると、やはり彼には愛など『無い』のだと思われない要素など無い。
彼は全く重みのない足取りで、己の父のところへと向かった。
「父上、私にはもう元素色は存在しません。
禁呪で剥がしました。廃嫡で結構です。
後は出来の良い弟が何とかしてくれるはずです」
そして、言いたいことを一方的に告げた。

貴族は魔法が使える者と決まりは無いが、魔法が使えるのは貴族である。

魔法は平民には使えない。
時折、貴族の隠し子等の理由で平民にも魔法の元となる魔力を持つ者がいるが、その様な者は全て貴族に引き上げられる。
通常はフォーミュラ家が未来の帝国に必要な存在として、自前のフォーミュラ貴族少年院に引き上げる。
稀に貴族嫌いの魔力持ち平民が、貴族になることを拒んで平民のまま反乱を犯すが、その場合は殺されるか、手足を切り落とされて種馬か苗床として使われる。
故に、平民には魔法が使える者はほぼ残らない。
そして魔力には何かしらの色が付く。
無色の魔力など、この世界では未だ存在が認められていない。
魔法が使えるのが貴族としても、貴族が魔法を使える必須性はない。
だが、魔道公爵として名を馳せるブドー家においては、そうはいかない。
故に、魔力を証明出来ない者は、次期ブドー公爵としては認められない。
「父上、申し訳ございません」
「…待て、グラスリート!!」

ブドー公爵の嫡男グラスリートはあり過ぎた才により、魔法を魅力し魔法に魅力され

て、真理に近付いた結果、理性やその他のものを垂れ流し、その感覚に興奮を覚え、世界を漂白することで一層の絶頂を迎えんとして歪んだ。
色付く世界の底にある無垢のキャンパスへ至らんとした研究者達は、これまで尽く血肉と魂を垂れ流して死んだ。
故に難解に封印された。
しかしその封印を容易に解読した天才少年は、世界の元の姿を曝く行為をして尚、性的興奮を垂れ流して生き延びた。
そして世界の漂白そのものが性癖へと変わって、常人とは掛け離れて歪んだ。
だが、ブドー公爵には今の息子に、歪む前の面影を僅かに、しかし確かに見た。
故に引き留めた。

グラスリートはそれまでの周回に置いては、実験の為に実家の権益を手放す事を見苦しく拒んだが、今回は彼にはその必要も無い。
「これ以上私がいては、お家の迷惑でしょう?
全ては私の不始末ですよ。では、今までありがとうございました。
今後は御祖母様の旧姓であるオフステインを名乗らせて頂くとしましょう」
グラスリートは父の静止を聞くことなく、一方的に家を出た。

四天王最賢は、四天王最堅に弟子入りする

家を出たと言っても、グラスリートは大量の資産と別荘は個人の物として所有している。

そして、この先の情勢を知るが故に、何に投資すれば良いかなんて考えるまでも無い。

その上で先の見えない研究には莫大な金額が必要となり、資金は底を尽きる。

だが、今回のグラスリートには先が見えている。

実験すらせずとも、頭脳の中にその膨大な実験結果が詰まっている。

そもそも実験の目的は、真理を解き明かす事だった。

もはやそれもどうでも良い。

既に真理の片鱗は見付けたが、それは偶然の産物によってだ。

自ら探し求めたものではなく、何かに与えられたもの。

「この一周でしか持ち越せない可能性は高いでしょうが、故に今回は諦めましょう」

最も真理に近付く周回にありながら、グラスリートはそのチャンスを不意にするつもりだった。

「別の周の自分にとはいえ、与えられた知識で成し遂げても達成感もあったものではあ

りません。
故に――――――不要。
たまにはスポンサー様たちに返す側に回ってみましょうか」

自分以外の何かによって真理に最も近付く周だからこそ、彼はその周回で真理の追求をする事をやめた。
例えこれまでの自分からに依ってでも、与えられた知識に従うだけで研究を達成するなど、それこそ全てのグラスリートが許さない。

「しかし研究もしないとすると、途中成果も出ません。
これでは、あの皇帝に売り込む物がありませんね。
今周は実験で壊した敵国の平民はありませんが、資料だけでも彼女経由で送っておきましょうか。
無知でもわかる資料にすれば、私には届かない程度の頭しか持たない彼女の手柄にも出来るでしょう」
グラスリートは、全ての周回から持ち越した研鑽を持って世界を残す術の論文をメルセデスに送り付けた。

…そこには己の名前すら記述せずに。

「あの可哀想な聖女には、僅かですが余り金でもくれてやりましょう。

金食い虫共に寄生されて大変ですからね」

グラスリートが言う通り、聖女はこの後予定通りにいくならば、悲劇の道を進む。

とはいえ、四天王は殆ど悲劇に終わるのだが。

聖女の場合は、己の育んだ孤児院出身の一人が帝国の敵となる。

「零(飢え)から救い上げられて一(命)を拾うと、今度は十(裕福な周囲)より足りない事に不満を持つ。

助けられただけでは満足せずに、多く持つ者が少ししか持たざる者に分け与えない事に不満を持つ。

挙げ句、恩人である聖女を殺すとは――――――ああ、実に救えない。

…その点、こちらが与えても更に要求しない聖女は実に聖女といえますね」

グラスリートが皮肉るように、死ぬ間際を聖女に救われた孤児の少女は、貧富の差を無くし全ての人間が平等であるべきだという信念の元に、主人公の側に付く。

というかメインを張るヒロインの一人になる。

聖女にも己(正義)がいるの側に付く様に求めるが、法と秩序と皇帝を重んじる聖女はそれを断る。

聖女は身分故皇帝とは結ばれないと理解して尚、皇帝を愛していた。

結果、最後の決戦で聖女は育て子に倒される。
御業により何度も再生を行い、その度に教え子に刺し殺されて死んでいく。
それはそれでお涙頂戴の流れなのだろうが、グラスリートには、恩をかける相手を選べとしか思えない。
メインヒロイン様は『助ける相手を選ぶのは、本当の愛じゃない』なんてよくも己を助けてくれた恩人に言えたものだと、恩人にも恩を感じないキャラクターとして描かれているグラスリートは嗤う。
グラスリートにとって、特別に選ばない相手に向ける感情など愛とは呼べない。
有象無象に向ける無償の博愛など、グラスリートにとっては何の価値も感じられなかった。

騎士ガンブにとっては皇帝の意志と命を護る事が出来るならそれ以外を求めない男だというのはグラスリートも知っている。
予定なら、もうすぐすれば皇帝を護る最中、主人公の兄によって片眼を奪われるだろう。
ガンブは帝国と皇帝に尽くす者を認め、私利私欲のみに奔る者を認めない。
その信念は、皇帝を護る『力』は己だけで充分なので、他の者は気持ちだけで十分だ

という、強過ぎる自負という名の驕りの裏返しでもあった。
とはいえ、戦力は自分だけで良いという己でも気が付かない自惚れがあったとしても、成果より打ち込む姿勢と心の在り方を重視する、かの騎士の評価は高い。
…例え最後には、実力に劣る無数の想いの前に骸を晒そうとも、その高潔さは風化しない。

皇帝の親戚である神速の令嬢は、釣り竿と魚の捕り方の教育では無く、先ずは魚そのものをくれと飢えきった人々の恨みを受ける。
皇帝の親戚として、至高の貴族に連なる令嬢として、その命は敵対者に捕らわれれば尊厳と共に奪われる。
敗北した場合、彼女の血筋を周囲は許さない。
故に、主人公以外に討たれなかった時は、敗色が確定すると自らを消滅させる犠牲魔術などの手段を用いて自害する。
彼女にとっては、裕福になる方法も、強くなる方法も、貴族になる方法も、乞われれば教えるのだから、何もしないだけの人間には与えるつもりは無いという己の信念に恥じ入るところは無かった。
能力か意思のどちらかさえあれば、人は現状より先を目指せる。

『より先へ、より早く先へ、より速く先へ』という公爵家の家訓は、能力も意思もない人々には厳しすぎた。

それを甘えとしか思えなかった故に、フォーミュラ公爵家は民衆の敵として主人公達に否定されるのだ。

彼女は努力する事すら苦難とする弱者の甘えを、理解して許すことはなかった。

故に、努力をせずに不平だけを並べる下級民衆に後押しされた敵軍に、負ける事となったのだ。

国に利益を齎(もたら)せない者に生きる価値は無いという愛国心は、民衆全てを敵に回す言葉では無いが、少なくとも国に利益を齎せない層を敵に回してしまった。

「欲しいというだけなら、乞食にも出来る。

欲するものを手に入れる為に、何かをすることが大事。

欲しいものの為に、最も対価を払える者から優先して取得することが出来る。

…実に正論ですが、その言葉を乞食そのものである愚衆に伝えても反感しか買えないのですよ」

グラスリートが呟くように、フォーミュラ家の収入源の一つが、迅速果敢な買い占めからの転売だったことも、恩恵に与れない人々から恨みを買った。

欲しいと思う気持ちだけはあるが、そう思うだけで早く買う事も、早く転売された品

物の為の購入資金を投入できない者にとっては怨敵とも言えた。
と言っても、帝国内にはそれらの声は少ない。小国に匹敵する資産で転売を行う公爵家による被害者は、根こそぎ作物を買い叩かれる他国の民であり、寧ろ帝国内はフォーミュラ家によって、様々な作物が国内に安定して供給される事となっていたからだ。
フォーミュラ家が売れるギリギリまで高く釣り上げて売りつけるのは他国に関してのみである。
他国の農家や領主自らがフォーミュラ家に、資金難を解消する為に作物を売ったとはいえ、それによって他国では作物の品薄が慢性化していた。
それに、金さえあればフォーミュラ家から安定した供給があるというのは、品物さえあれば資金を得られるというのは、苦痛を含みながらも安心と楽はあった。
他国はその安心と楽の猛毒から逃れられなかった。
フォーミュラ家は市場そのものを握っていた。
その恨みの矛先は、作物を販売した農家や領主ではなく、購入して転売する資産家へと向けられる。
利益は帝国公爵家に売り払う側に入るのに、恨まれ役は全て帝国公爵家が請け負ってくれる。
帝国にとってフォーミュラ家が無くてはならないのと同じくらい、他国にとって

フォーミュラ家は害悪とされた。
他国は積極的にフォーミュラ家を悪役にした。

武人が敵を倒して土地を奪い、商人が格差を拡げて富を奪い、聖女が正論と善意によって反乱の気概を奪う。
これに皇帝自身のカリスマを含めたものが、帝国の統治の手段であった。
他国に対して、打ち倒し力で支配し、経済で生活を支配し、厚意で人情を縛る。
そして動けない他国を贄として、帝国を含めた世界を根本から救う。
これがヘリオスの戦略であった。
ただ、武人や聖女が個人に属する性質なのに対して、令嬢の性質は家に属していた。
彼女がどうあろうと、フォーミュラ家という事実は変わらず、彼女の後を継ぐ者がいればその性質は継承される。
帝国以外の国にとっては、フォーミュラ家に生まれた皇帝の親戚というだけで、絶対に生かしてはならない存在なのだ。

「だからどうでもよい連中に狙われる」
溜息と共にそう独り言を言う学者にとっては、自国の民すらどうでもよい。

ましてや敵国の民衆の生活などよりも、自分の研究のスポンサーの方がよほど価値があった。

「癪ですから、害虫駆除の研鑽について脳筋武人にでも聞くこととしましょう」

これまでの二倍強くなれるのなら、四天王が一人いなくても十分だとグラスリートは考える。

メルセデス・フォーミュラを守る為……ではなく自身の研究のスポンサーを守る為に、グラスリートはガンブ・レイドに修行を付けてもらう為に練兵場に向かうことにした。

この国では、冒険者の転職先として兵士の職がある。

グラスリートの思惑通り、そこには最強の冒険者にして最強の兵士がいた。

「ガンブ、私を鍛えなさい」

しかし、ブドー家の看板も失い、鍛えた様子もない馴れ馴れしい男をガンブは相手にもしなかった。

グラスリートにとっては、後の四天王の同僚だが、この周回の現時点においては、ガンブにとっては悪評があるだけの他人である。

この時点で既に騎士の頂点にいる男ガンブは、役に立ちそうにない頼りない男を相手

にしようともしなかった。
周りの部下たちにグラスリートを押さえつけさせて、背を向けて去った。
だが――――――――
「フンッ!!」
ガンブは己の顎を正面から殴りつけたグラスリートに、よろめく事なく思い切り殴り返した。
吹き飛ばされて、全身を土埃と血で汚しながら倒れ込んだグラスリートは、それでも立ち上がった。
幼少時代の訓練経験と、未来の己たちの技術を混ぜても脳筋には叶いませんね、と科学者は残念がった。
「…貴様、名前は」
「グラスリート・ブドー…いえ、グラスリート・オフステインです」
皇帝を信奉する騎士は、ノーダメージとはいえ己に真正面から殴りつけた快挙に内心で興奮した。
「そうか、構わんぞ。
俺が鍛えてやろう、みっちりとな」
そして真正面から己を殴った事以上にグラスリートを買ったことがある。

「――だが、しっかりと身体を治してからだ」

グラスリートに殴り返したガンブは、その時点でグラスリートの全身の骨が折れているのを理解していた。

その状態で尚、帝国最強の騎士に挑むその気概、騎士団長ガンブ・レイドが歓喜に震えるのを隠すに耐えられなかった。

肉体は全く鍛えていない貧弱極まりない。

だが、己の顎を打つセンスと、己を一切顧みない程の信念の詰まった瞳。

ガンブはそれを信じた。

グラスリートは何時でも最速（メルセデス）を思い浮かべられる。

フォーミュラ家の紋章開放時は人間が理解し得る最速だ。

対して、グラスリートの戦闘法は最遅であった。

グラスリートの技の一つに、あらゆる慣性を奪い物理衝撃を無効化するものがある。

彼の前には物理的な攻撃は速度を失い無価値と化す。

それに未来を計算することで予知染みた挙動を組み合わせる事で、敵の攻撃を無効化する。

それを逆転させて、元々存在しない慣性を強力にあったことにして、瞬間的に己を撃ち出した。

本来なら発生するはずのない物理衝撃がグラスリートに発生して、その反動でガンブの前に回り込む。
己の怪我を無かったことにする魔法など使う暇は無い。
そしてその慣性を無効化して、再びガンブに向かって己を撃ち出した。
鍛えていないグラスリートの身体はこの時点で既にボロボロだった。
ガンブはグラスリートの表面を殴り付けたと同時にそれを理解して、その衝撃を逃したのだ。
立ち上がったグラスリートの瞳を、ガンブは然りと見つめ返した。
「その眼、わかるぞ。
お前にも、護りたいものがある」
「…さあ、何のことやら」

こうして、グラスリート・オフステインは特例でガンブの直弟子になった。
彼曰く、戦いから遠ざけてスポンサー様を長持ちさせる為に。
冒険者としてのランクを上げて、その資格（ランク）に相応しいかつての職を自ら掴む為に。

彼女に捧ぐ誓い

グラスリートの高貴で類稀な頭脳をして、見落としてある事がある。
いや、この期に及んで見ない振りをしていることがある。
彼は今回の人生では真理の研究は既に必要がない――即ちスポンサーは必要ないのだ。
それでもスポンサー呼びをするのは、ある種の照れであろう。
そして、スポンサーを求める行為は、メルセデス・フォーミュラとの繋がりを維持する行為そのものであった。
更に言えば守るにしても、己を鍛える必要などないのだ。
ただ、生き残る為にという目的なら、逃げさせれば良かった。
そうしなかったのはきっと、幼い二人がした約束をその手で守る為。
〝私があなたを幸せにするから、あなたは私を幸せにして〟
――二人の最初の約束は、最後の今周回へと受け継がれた。
彼が見落としているのではなく、気にしていない事を含めるなら他にもある。

自分への風評だ。
他人からの評価を一切気にしないからこそ、元のゲームではあれ程までに、ヘイト管理（嫌われ役を遂行する）に徹する事ができた。
だから、その逆に関しても同じことが言えた。

「完成したの!?
…驚いたわ。この研究は間違いなく世界を変える。
――――良くも悪くもね。
…それにしてもどういうことかしら?」
「さて、どういうこととは?
ああ、紅茶が冷めていたのなら入れ直しましょうか?」
「ふざけないでっ!!」
黄金よりも更に眩いと称される美しい髪を持った令嬢、メルセデス・フォーミュラはテーブルに手を叩き付けて立ち上がる。
未だ冷めてもいない紅茶は跳ね上がり、カップが倒れることは無かったが、飛沫が

テーブルクロスを染めた。
しかし、それを追及するものはここには居ない。
「どうして、どうして貴方の名前がありませんのっ!?」
メルセデスは、自分に帝国の命運を委ねる理論を開発した手柄を譲る、元婚約者へと叫んだ。
当初、この論文がメルセデスにも分かるような解説と共に、匿名で送りつけられた時、送りつけられた相手を迷うこと無く特定した彼女は、自らの瞬速で、グラスリートがいるとされる居場所へと駆け抜けた。
「…婚約破棄を発表したのがフォーミュラ家でも、その原因を作ったのは紛れもない私。慰謝料が必要とは思いませんか?」
「この完成した理論があるのなら、婚約破棄などどうとでも出来たはずですわ。何故、婚約破棄が決まった翌日に、この慰謝料とやらを押し付けるのか。私が言ってるのはそういう事だと分からない頭でも無いでしょう?」
激昂する感情的な幼馴染みに、そういうところを好ましいという内心は出さずに、聞き分けの無い子供をあやすように青年は告げる。

「私は研究に専念したいので――――」
「――――研究の完成は私もよおく理解しておりますが…？」
グラスリート自身によって研究成果が記された書類を叩き付けながら、青筋を額に浮かべて令嬢は攻撃的に笑う。
「ええ、ですからまだ他にもやりたい研究の為に、スポンサーをお願いしたいのです。
借りを返せない無能には飢えていても施しさえ与えないが、利子を付けて返せる相手には積極的に助けを押し付けるのが投資家のフォーミュラ家でしょう？
その点、天才の私は投資に値する」
フォーミュラ家の統治の在り方を前に出して、学者は新しい二人の関係について定義する。
メルセデスは良くも悪くもフォーミュラ家の直系である。
助けても更に助けを乞い続ける者に厳しく、受けた恩を返す能力と気概に溢れた者に褒美を取らせる絶対実力主義を強いるフォーミュラ家の令嬢である。
だから、グラスリートへ資産援助をする事そのものには異論など無かった。
更に言うのなら、フォーミュラ家にも帝国にも利益にならない他国を犠牲にして、帝国を色の錆から守る理論はフォーミュラ家的でさえあった。
だが、問題はそこでは無かったのだ。

「…言いたいことは分かりました。
あなたは私と――――――婚約を破棄したかっただけなのですか？」
彼女にとって、問題はそれなのだ。
婚約破棄を免れようと思えば、免れた男が敢えてそれを受け入れた。
それこそが、彼女にとっての問題だったのだが――――――

「そう取られてしまいますか…。
私は何もかもから剥離して研究に染まりたいのですよ。
そして必要な資産だけをサポートして貰えるのなら、そんなに都合の良い現実を確保出来るだけの能力を示すのは無理からぬ事でしょう」
グラスリートはメルセデスを幸せにしたい。
それは全ての周回の彼の一番最初の願いであり、現在の彼に託された誓。
だが、メルセデスが幸せになれる場所は己の隣だとはグラスリートは欠片も思っていない。
最もメルセデスを護るに相応しい場所は、皇帝の隣に在る。
ラスボスの隣こそ一番最後まで安全な場所であり、中ボスの隣では下手をすれば中盤で死んでしまう。

メルセデスを幸せにする為ならば、場所など幾らでも最良の相手へとあけ渡そう。
それが、グラスリートの選択だった。
「何故…」
「これで皇妃への可能性が生まれたでしょう？」
元々フォーミュラ家に生まれた以上、本来嫁ぐべきは皇家であるとグラスリートは告げた。
グラスリート家と婚約した時点で間違いだったのだと。
「…本気で、本気で…言っているの？」
グラスリートは知らない。
皇家でなく、ブドー家を嫁ぎ先に選んだのは、メルセデスの父ではなく、彼女自身であったとは。
当然、そうなるに至った想いなど、彼には理解の外であった。
「ええ、そこが一番安全な場所です」
「――――安全？」
そして同様に、この周において彼が自らの意思で皇帝に幼馴染を託した理由は、彼女にとって理解の外にあった。
「まもなくこの国は戦火に包まれる。その時メルには最も安全な場所にいて欲しい」

聞かなくなってから長く長い時が経った。
懐かしさを覚える己への呼び掛けに、思わずメルセデスは惹き込まれた。
「…どういうこと?」
「資料に目を通せばわかるでしょう。
その計画は、帝国には必要です。
故に皇帝陛下は実行するでしょうが、その為には帝国以外の多くの国を犠牲にする。
消え去る国の人々が大人しく犠牲になってくれれば良いですが、そうもいかないでしょう?」
魔導を使えば世界は染まっていく。
世界には色が重なり過ぎて、新たに他の色を受け付けない黒いキャンバスになりつつある。
そうなれば魔導がいずれは消滅し、魔導で栄えた文明は潰える。
帝国の繁栄の為には、魔導はこれからも必要だ。
故に、帝国以外の世界の人々ごと世界を漂白するのがグラスリートの提出した計画だった。
グラスリートからすれば、せめて大人しく滅びを迎えて帝国の役に立てば良いと考えるが、そう上手くもいかないことを理解もしていた。

「別にリ、リートも戦線に出る訳じゃ無いでしょう？
そんな性格では無いものね？
野蛮とか散々馬鹿にしていたわよね」
メルセデスも少し、いや多分に勇気を絞って昔の呼び方で、もはや婚約者ではなくなった男に問う。
「……」
貧弱な科学者が戦線に参加するわけが無い。
国を護るロマンチズムとは程遠い男のはずだ。
はずだった。
だが、その返答は肯定ではなかった。
「嘘でしょうっ!!
貴方はそんな人じゃなかった。そんな人じゃなくなってた。
どうしてっ!!　どうして今更になってっ!!」
「天才の私でもよくわからないのです。
メルに理解できるとは思いませんよ」
甲高い音が鳴った。
発生源はグラスリートの頬。

打ち付けられたのは、美しい雫を目元に浮かべたメルセデスの手。
「馬鹿にしないでっっ!!
こんな簡単な問題もわからないのは大馬鹿だけよ。
私の為を願って死ぬ男に、婚約破棄させられるなんて、許せないにも程があります わっっ!!」
頬を抑えることなく、学者は令嬢に笑った。
「許さなくていいんですよ。
メルはただ幸せになればいい。
美しく笑いなさい。
それだけでいいんです」
痛みと共に触れた温かさを大切にするように、令状の元婚約者は笑った。

例えそこが自分の隣でなくとも、誓は果たされなければならない。
そうでなければ、己がここに託された意味なんて見つからないのだから。
その為に、必要な手段はとってきた。
グラスリートはどうでもよい人々に向ける愛はない。
ただ近しい人には優しかった時代の名残がある。

同じ四天王には同情さえある。
無理矢理弟に家を引き継がせたのも、次期当主が戦死する混乱を避ける為でもあった。
だが、グラスリートにとってメルセデス・フォーミュラは特別だった。特別過ぎた。
だから――――――
「さようなら、大切な人（メル）」
幼馴染の科学者の別れの言葉に対して、今度は公爵令嬢が無言で応えた。
そして互いに背を向け、令嬢は立ち尽くしたまま、元婚約者の去る足音をだたただ聞いていた。

遠く離れた令嬢の姿を背に、悪逆の魔導学者は誓う。
あらゆる可能性（エンディング）において、メルセデス・フォーミュラが生きていることは無い。
そう、エンディングを迎えれば、確実に公爵令嬢は生きてはいない。
フェルマーの最終定理に然り、難解そうな問題の解法は案外単純なものだ。
エンディングの時点では、必ずメルセデスが死ぬ。
ならば、エンディングまで行き着かなければいいだけなのだから。

民衆の希望は独裁帝国を倒しましたとさ、めでたしめでたし――なんて言わせなければいい。
メルセデス・フォーミュラを死なせない解法は、極めて単純だ。

「その前にゲームオーバーにすればいいんですよ」
極めて簡単な答えに行き着いた探求者は、極めて難解な課題を前に歓喜する。
世界を敵に回す苦痛など、メルセデス一人の幸せの前には気にする価値さえも無いのだから、心より喜ぶ以外の選択肢など存在しなかった。
たった一人の勇者を殺す為には、かってのままでは行えない。
これまでのやり方では、どのグラスリートも成功出来なかった。
だから直接動きやすくする必要がある。
だから周囲を動かし易くなる必要がある。
だから個人として強くなる必要がある。
だからあらゆる面において強くなる必要がある。

「さあ、私の私による彼女の為のゲームオーバーを始めましょうか」

モンスター名：盗賊　種族：人間　役割：試験課題

ガンブの拷問染みた訓練の元、グラスリートはその才能を発露させるように成長した。

既に、グラスリートは冒険者としての位階は第四階層（ランク）にある。

この国においては、帝国がモンスターと定めたものを倒すことなどで収入を得る、冒険者という他国にも支部がある民間職がある。

そして公的な戦闘職に就く場合には、これらの冒険者としての資格が必要になる。

逆に言えば、兵士や護衛などの戦闘職には、冒険者としてそれなりの位階になければ転職できない。

民に勝手に競争・向上をさせ、その上澄みを国費で雇うというのは、極めて合理的であった。

また、他国で高ランクの冒険者資格を取得した場合、帝国への無料移住権などによる勧誘が行われる。

他国でも必要とされる人財を引き抜き、他国でも足手まといになるような人間を押し付けるのが帝国流だ。

あまりにも成績が悪いと、冒険者資格が『非帝国領のみで使用可能』となり、その後更に成績悪化で、ランク剥奪により他国での仕事を選ぶハメになる。

格差が凄まじくとも、経済がダントツで豊かな帝国に住みたいという人は多いが、出て行きたいという人は少なく、冒険者資格が『非帝国領のみで使用可能』となった時点で、冒険者を辞めて帝国に残ろうとするが。

冒険者資格制度は、国家認定では無く、民間認定ではあるが、その元締めはフォーミュラ家である。

帝国の後押しの元に、大財閥が独占して市場統一を行っている。

それがフォーミュラ家の他公爵家から頭一つ飛び抜けた理由であり、メルセデスが原作主人公に目を付けた理由でもある。

尚、正兵士に就職、または准兵士から昇格するのに必要な資格は、今回グラスリートが軽々と取得したCランク。

以前までの周回で、冒険者ランクに依らない功績と実績で、四天王まで上り詰めたグラスリートには造作も無かった。

Cランクに昇格する為に倒すべきモンスターは、昔からの既定で人語を解する人型のモンスターと定められている。

それまでの試験では、人間サイズのネズミやイナゴの化け物の幼体などを倒していれ

ば良かったが、Cランクの場合は明確に試験内容として討伐対象のモンスターの種族が決まっている。

夜盗や、盗賊頭とよばれる人型モンスターである。

帝国がモンスターと定めた生物を、帝国の為に斬れないのであれば、正規兵士職に就けるCランクは取得出来ない。

例えそれが、貧困に追われ法に背く道を選んだ元帝国民や、帝国に逆らい滅ぼされた小国の生き残りに酷似していても、それは帝国が定める以上有害生物（モンスター）だ。

法と正義を重んじる模範的な帝国民であれば、心を痛める必要などあるわけがない。

冒険者資格による規定の為に、帝国正規兵はその全てが、人型のモンスターを殺した経歴を持つことになる。

軍属に限らずCランク以上の者も多くいる。

その彼らも又、弱肉強食を是とする決断を刃や魔法で示した者達だ。

より高い待遇や地位の為には、帝国にとって有害な人間を殺害する事を自らの手で行う必要があった。

この国には反戦論者などいようはずもない。

そういった意志のものは、Cランクの壁に当たって、他者に影響を及ぼす地位につけないからだ。

Cランク昇格試験で、他の受験者と共にグラスリートが討滅しに向かった先は、深い森の中の小さな一軒家だった。
帝国で犯罪を犯した者、もといモンスターが現在ここに隠れ住んでいるという情報が入った為だ。
通報したのは少女。
元はその家は少女の一家が住んでいた。
そこに追われた盗賊が逃げ込んできた。
この直後、裏付けが取れたので正式に帝国から数名の戸籍が抹消し、確認済みモンスターが同じ数だけ登録された。
盗賊達により、父親は直ぐに殺された。
少女が逃げた時点では、母親は殺されてはいなかったというが、無事では無いだろう。
少女の兄は生まれつき足が悪く、母親が家の隙間から逃がせたのは少女一人だけだった。
元々、足が悪い少女の兄は、帝国では余程他の能力が無ければ冷たくあしらわれる存在だ。
その為に父親は帝国の離れの森に家を建てた。

人に見下され、息子に惨めな思いをさせない為に。
それが今回裏目に出た。
帝国から程良く離れている為に、逃亡中の盗賊が立て籠もる拠点として選ばれてしまったのだ。

最近は都合良く人型モンスターを駆除する機会が無かった故に、冒険者管理組織は嬉々としてこの事件をCランク昇格試験として扱うことにした。
帝国基準で考えれば、高額な依頼料を払えない少女の為に、第三階層（Dランク）の中でも上位の冒険者が集団で挑むのである。
貧民にとってこれ程の幸運な偶然は無いと考えるのが、無関係な一般帝国民の思想だ。

「おやまあ、小さな小屋ですねえ」
少女が己の家であった場所へと案内する中、一人の知と美に愛された青年だけは余裕があった。
他の冒険者の多くは、初めて人と殺し合う事に恐怖があった。
自らの手で殺すのならば、人型モンスターと割り切れるものは少ない。

最近試験が行われなかったが故に、受験者の数が多かったのにも関わらずだ。
しかし、一人だけその恐怖を感じていない青年がいた。

「さて、小屋ごと吹き飛ばしますか？
それとも人殺しの童貞卒業はしっかりと体験してみたいですか？」
他の冒険者に対して、簡単な提案をするように、いや事実本人にとってはそのつもりで腕を広げて眼鏡の青年は問う。
一人極端に怯えている者がいれば余裕が出来るように、一人余裕がある者がいれば却って不安になる。
今回の受験者は臆病者が多かったようだ。
改めて今から自分達が行う行為を再確認させる青年に、残りの受験者は恨みがましい目で見た。
だが、今回の盗賊討伐隊に臆病者が多いことは、家族を盗賊と共に残してきた少女には関係なかった。
「そんなことより、私の家族を早く助けて」
少女は唯一この状況を打開出来そうな青年に乞う。

「ええ、わかりました。速やかに家ごと…いえいえ、冗談ですよ。
何とかするとしましょう」
笑えない冗談のようなことを言いつつも、再度他の受験者に振り向いた。
「それにしても皆さん、本当に良いのですか？
折角人殺し初体験は、殺しても後腐れも無く良心も痛まない悪党だというのに。
それにこちらの数が多くて都合も良い。
大抵は討伐対象に対して多過ぎる数では挑めないらしいではないですか。
これはお得だ。
安全に心置きなく、心身共に健康なままではじめてのおつかいを済ませられる」
それは他の者には理解し難い理由だった。
そんな己の中で見ないようにしていた事に、無理矢理目を向けさせられ、その上で自分で人殺しの道を選べというのは余りにも冷酷で、余りにも現実的だった。
「…さて皆さんが今後、兵士にでも成った時には初めて殺す相手は、帝国に逆らう以外には罪を犯していない他国民かも知れませんよ？
他国民よりも罪を犯した元自国民の方が情を感じるというのなら、それで構いませんが。
おおっと失礼。

帝国が定めれば如何なる理由も無くとも犯罪者ですし、モンスターでしたね。
無辜のモンスターなんてそもそもいませんでした。
ですよね、映えある帝国の善良な冒険者の諸君」
元公爵家の貴公子は、当たり前のように帝国民としての建前を述べる。
一々気に障る他者を見下した物言いに、多くの者が反感を持った。
「やはり私一人に任せますか？
…もっとも、私一人に任せた場合は、他の参加者は冒険者の義務である帝国の討伐命令に反旗を翻し、モンスターに成り果ててしまいましたと報告せざるをえません。
――では、もう一度聞きましょう。
帝国に従い悪を裁く正義となるか、帝国に背き正義に裁かれる悪となるか」
それは脅迫だった。
それは甘言だった。
それは選ぶ余地が無かった。
臆病者達は、ここで漸く覚悟を決めた。
一人の煽動者が、羊の群れを野犬の群れへと変えたのだ。
当の本人はそれを確認するまでも無く、再びグラスリートは小屋へと視線を向けた。
それはまさしく、他者の上に君臨する者特有の振る舞いだった。

「さて、私が盗賊なら立て籠もった家の戸締まりはしっかりとしておきます。
何せ、彼らが戸締まりをしなければ恐いお客さんが来ると言うことを理解していなければ、医者の不養生というものです。
ですから――――――、やはり家ごと壊しましょう」

瞬間、小さな家の屋根が全て弾けて消えた。
眼鏡の学者はただ指を鳴らしただけ。
それだけで巨大な質量が弾けて、そして消滅した。
「弓を持っているそこのあなた達、ドアから出て来た間抜けを射抜きなさい」
流石に屋根が消えれば、盗賊も様子を見に外に出てくる。
屋根が無いとはいえ、壁から外を見るには壁が高すぎる。
ならば咄嗟にドアから出てくるだろう。
そこから出てくると分かっているのなら、ドアに向けて複数人で射れば当たるだろう。
グラスリートはそう予測した。
結果、動転してドアから出て来た間抜け一人は、矢の練習に使われた後の巻藁のよう

に無様に死んだ。
「まあまあですね。
では、この後はそれを家の壁に掛けて何とかして下さい。
私は私で色々しておきますから。
仮想紋章起動（エミュレーター）」

その隙を逃すこと無く、常人では考えられない速度で駆け抜けた変態眼鏡は、開いたドアから入り込んだ。
ドアを閉じようとした賊の一人の腕を透明な三角の刃で断ち切り、そのまま反対の手で同じ刃を賊の胸に差し込んだ。
「戸口にノックもベルも無く入ってすみません。
ですがあなた方には、屋根をノックするくらいで丁度良いでしょう?」
悠々と入ったグラスリートが視認出来る範囲には、盗賊連中しかおらず、人質、もしくは死体の姿は無かった。
グラスリートとしては別に人質が既に死んでいたならばそれはそれでどうでも良かったが、恐らくまだ一人か二人は緊急離脱用の駒として保有している筈だと考えていた。

同時に、盗賊の浅知恵など考えてやるのも時間の無駄とも。
「てめぇっっ」
どう見ても平民でない男の見下した態度に、盗賊の頭は怒りを露わにした。
優秀な者だけを保護する帝国と、それを肯定する成功者たる貴族のせいで、彼らは身を窶した。
少なくとも盗賊達はそう考えていた。
「…俺達を使えない奴らだと、お前たちのルールの中で虐げておきながら、そのルールから逃げ出したら今度は殺しに来るのか。
良い身分だなぁ、ぶっ殺してやるよ」
先々代の皇帝の時の様に、発行される生存権を購入出来無ければモンスター扱いという制度は無くなった。
しかし今も尚、帝国は弱者に優しくしない。
あくまで厳しいのではなく、優しくはしないだけ。
虐げる事は無いが、苦しむ様を見ても助けはしない。
そうなると弱者の取るべき合法的な手段は２つ。
おとなしく死ぬか、努力して強く成長するか。
それらの手段のどちらも選べない者は、違法的な手段を選ぶ。

そして有害と判断されて、モンスターとして速やかに処分されるのだ。
「ええ、あなた方より余程良い身分ですよ。
もはや、人間ではなくモンスターとなったあなた達よりは。
ああ、無能な犯罪者にも人並みの身分があると考えていたらすみません」
どこまでもグラスリートは他者を見下している。
もう公爵家の跡継ぎでも無いというのに、その性根は気位高く、そして冷酷だった。

「俺達を追い詰めた反省も無いみたいだな。
どうしてこうならないといけなかったか、考えることも出来ない馬鹿め」
思考能力の無い馬鹿という言葉は、少しだけグラスリートの自尊心を擦ったが、所詮はモンスターの言うこと。
気にすることも無い。
考える価値すら感じられなかった。
「生きることが出来ないのなら死ねば良かったのでは？
流石に、飢え死にすることは帝国法における犯罪ではありませんよ」
「お前達ってやつはっっ!!!!」
モンスターの言うことなど、真剣に考えるまでも無い。

こうやって適当な挑発をしていれば、何故か勝手に自分を抑えきれなくなるまで激昂する。
盗賊達は、とても自分も挑発したとは思えない程、明らかに見下したグラスリートの挑発に怒りを覚えた。
…グラスリートが挑発する気でもなく、自然の摂理を説くように言ったことが大きな要因だった。
耐えられなくなった一人が、また間抜けにもグラスリートに斬り掛かるが、グラスリートに当たる直前で停止する。
その男の腕から先と剣だけが、時が止まったように動かない。
グラスリートは、ゆっくりとその剣に手を触れる。
後少し剣を押し込めば、たちどころに変態眼鏡の腕は切断されるだろう。
その触れた部分からは手袋が斬れて血が僅かに滲む。
だが剣はそこから動くこと無く、それ以上深い傷は負わせられなかった。
「全ての『初動』が死んだ空間では、即ち時間が停止したと同じです。
言って理解出来ないのなら応用を見せましょうか？」
グラスリートは片腕を空間に固められた男の首に血に染まった手袋を着けたままを添える。

「では、喉内の空気だけを固定しましょうか」
瞬間、空気が停止する。
固まった空気の蓋が、肺から出すことも、口から入れることも許さない。
それを為した憎い術者を殺そうにも、片腕と武器が少しも動かせない。

「さて、彼がこちら側の人質ということにしましょう。
そちら側の人質は何処ですか？
時間をかけて考えても良いですが、そうなるとこちら側の人質が役目を果たせなくなってしまいますね。
さあ、仲間を見捨てますか？
…それとも、この程度の男は仲間でもありませんか？」
グラスリートの目的は、己も人質を取ること――――――ではない。
あくまで、人質も一時的な作戦の手段の一つだ。
強い手段なら手札は少なくていいが、強い手段で手札も多いのならば、それに越したことはない。

「うっ動くなっ!!」

眼鏡の貴公子に注意が向けられている間に、梯子(はしご)を使い、屋根が無くなった壁の上に登ってきた他の冒険者達が矢を携えていた。
「遅かったですね。
逃げて昇ってこないのではと不安になってしまいましたよ」
壁の外側から昇る為の梯子は元より用意されていた。
突入前に変態眼鏡がそれを壁に掛けろと指示していたものである。
弓兵達は親玉の頭部を狙っている。
盗賊団の状況は詰んでいた。
「くっ、どちらにしろ皆殺しにするつもりだろ。
むざむざやられる俺達じゃねえ。
おいヘケン、人質を連れて出てこい」
やけくそになって、盗賊の頭は叫んだ。
「頭、ガキの方は足に刺した杭を抜くのに時間がかかりますぜ」
「なら女の方だけで良いっ!!
人質がこっちにもいることを教えてやるんだ」
「ああ、そちらにいたのですね」

盗賊頭が顔を向けて怒鳴った方の部屋から、男が虚ろな表情でおかしな笑いと過呼吸を繰り返す女性を引き摺ってきた。
誰の目にも、これが逃げた少女の母親であろうことも、盗賊達の身勝手な欲望で壊されたことも想像に難くなかった。
「コーヒテ、コーヒテ」と笑いながら咽せる有様を見れば誰でもわかる。

「…これはもうどうしようもありませんね。
弓兵達、そこの人質ごと盗賊達を殺しなさい。
弓を持たぬ者は、家を包囲して逃げ出す者を斬りなさい。
少女が逃げ出せるほどの隙間がある家です。少年や小柄なモンスターも逃げ出さないとは言えません」

そうお願いしても、弓兵達は人質ごと射殺すのには抵抗がある様だった。
「やれませんか？　では、こうしましょう」

グラスリートが投げた硝子のカードが人質となった女の首を切断した。

「矢が当たるかも知れない人質はもういませんよ？」
表情一つ変えず告げる美しい青年に、盗賊達は、そして他の冒険者達は恐怖した。
「クソッタレだ。
全部全部クソッタレだ、
皇帝一人に支配される帝国も、フォーミュラに誑かされる帝国もクソッタレだ」
その言葉で、青年の表情がハッキリと変わった。
「運命の女神よ、どうか皇帝とその妻子供に呪いあ――――」「――――射殺せ」
僅かな言葉にも関わらず、圧力を感じさせるグラスリートの命令と共に、室内に矢の雨が降り注いだ。

その後、剣士達がくまなく家の中を探したが、どの部屋にも残りの賊はおらず、足を杭で打ち抜かれた少年が見つかっただけだった。
晴れて試験内容を達成した冒険者達だが、その表情は暗い。
「何か言いたそうですね。どうぞ？」

「どうして、人質まで…」
質問した冒険者以外の他の者も同様の視線を向けた。

「簡単なことですよ。
あの姿を娘に見せられますか？
確かに殺したのは私ですし、反省も後悔もしていません。
ではそこの少年、あの状態の母親を妹に見せることを是としますか？」
生き残った少女の兄に、グラスリートは問いかけた。
「…いえ」
「父親が殺された直後に、抵抗した母親も殺された事にしましょう。
あなたの妹は少し離れたところにいますが、そう伝えると言うことで良いですね」

少年は、肯定も否定も出来ずに沈黙を以て答えた。

その後、盗賊達の死体は森の入り口にある罪人用の杭に貫いて放置され獣の餌となり、惨劇のあった小さな家は夫婦の死体と共に、彼らの子供達によって火を付けられて

処分された。

――――それから一年が経った。

「シエル、そこだ!!　師匠に一撃でも当ててやれ」

「はいっ!!　ソラ兄さんっ!!」

「…弟子を取った覚えも、一撃を受けるつもりもありませんが」

嘗て、ガンブがグラスリートを鍛えた場所には、帝国軍総指揮官第三補佐役、グラスリート・オフステインの部下として車椅子の少年と、魔法使いの少女がいた。

その理由については、またいずれ語られるだろう。

何せ、変態科学者の下に凄惨な過去を持つ兄妹の部下がいた事自体は、元のシナリオの通りなのだから。

朴念仁とラブコメはシナリオの変化を示す？

グラスリートは違和感を感じていた。

「おかしい。

明らかにおかしい。

…ガンブ・レイドは皇帝への忠義一色の人物の筈」

そう呟くには理由があった。

冒険者ランクも第五階層（Bランク）に至り、正式な軍属として近衛兵長兼ねて総司令官ガンブ・レイドの配下として所属したグラスリート。

しかし、そこで待っていたのは先任の副官による、己の居場所を維持する為の必死な抵抗だった。

「貴方がお茶を入れるのが上手なのは理解していますが、ガンブ様にお茶をお出しするのは、この私のお仕事なんですからねっ!!」

妙に線の細い、というかか弱い印象を持つ女性副官は、やたらとグラスリートを牽制していた。

女性兵士といえば、いかにも丈夫そうなものが比率として高いのだが、その女性は儚ささえ感じさせた。

その女性がガンブを取られまいとするかのような必死さを、グラスリートに向けている。

ひとでなし科学者にはさっぱり分からない。

いや、ひとでなし科学者でさえも、理由は分かっているつもりだ。

色恋の類だ。

問題は、何故四天王に何度もなったグラスリート・オフステインが知らない女性が、よりにもよってガンブ・レイド相手に色恋しているのかがさっぱり理解出来なかった。

どうしてこうなった?

ガンブが、あの皇帝と帝国と戦闘以外に興味の無いガンブが。

人間相手では、皇帝一筋で同性愛者では無いかと疑っていた元同僚が、今回の周では美人な副官と仲良くやっていた。

「聞いていますのっ!?」

「…ええ、どうぞ御随意に」

かつての四天王としての同僚に対して出来るのは呆れだけだった。

しかも、このお嬢さんは明らかに平民の出では無い。

だが、その所作は明らかに貴族、それも極めて高位な家の者であった。
しかし、グラスリートの記憶の中に、貴族名鑑には彼女と一致する女性はいない。
所作もそうだが、その瞳と彼女が保有する、長き時代を掛けた事前魔法を通じて、血とリンクした固有平面コード（保有紋章）が、それ以上の事実を天才科学者には理解させた。
女性副官の円型紋章ＱＲコードはグラスリートの知識には載っていない。が、似たようなものなら数個存在する。
一つはゲームの主人公が持つ、円だけが描かれた、中身を自由に書き換えられる無限のコード。
一つはそれに近しい性質の仮想紋章。
グラスリートが所有するもので、形が決定づけられたハードでは無く、再書き込み可能なソフトによりその内容を決定することが出来る代物だ。
そして一つは――――――皇帝家の血脈に伝わる中身まで漆黒の円紋章。
同じく、全ての紋章魔法を高次に使用出来る。

その女性副官の首飾りには、それに極めて似た紋章が魔術的に描かれていた。
見た目は全く関係ない装飾であるのが、凡才には到底見抜けない理由だ。
その紋章こそが、か弱い彼女を第五階層（ランクＢ）に押し上げた理由であり、ガンブが気を遣う

理由の一つである。

「ガンブ様、今日の紅茶は最近我が国の植民地になったマーヤカオ産の茶葉ですの。
その…、どうでしょうか?」
「…悪くない、と言いたいが正直俺には茶葉の違いは良く解らないのだ」

それでも、無骨を地で行く男は、女性との受け答えにも華が無かった。
それでこそ四天王最賢の知るガンブ・レイド。
やはり色恋に対する適正は無い。
これでこそガンブだと、グラスリートは頷いた。
ガンブに色恋など似合う通りが無い。
「だがアルメリア。
君が入れてくれる茶は、どれも美味い」
「ありがとうございます」
アルメリアの声には喜色が隠れる素振りすら無い。
…色恋などガンブには縁が無かった筈だとグラスリートは記憶していたが、目の前で繰り広げられている光景と、これまでの護皇の鬼ガンブ・レイドの印象が一致しない。

互いに妙に気を遣ってそわそわしたガンブ・レイドなど、グラスリートが知る彼では無い。

「いや、おかしいでしょう」

耐えきれなくなり、変態眼鏡は脳味噌筋肉にツッコんだ。

「…何かあったのか？　わかるかアルメリア？」

「いえ、第二副官が良く解らないことに疑問を持つのは常のこと。

自称天才が考えることなど、第一副官の私には理解しかねます」

ガンブにはデレデレなのに、グラスリートには牽制に次ぐ牽制である。

いや少し待って下さいと、顔面だけは整った第二副官は爽やかな笑みを貼り付けたまま笑う。

同じ四天王で、女っ気がまるで無いと妙な仲間意識を持っていたガンブに親しい女性？

グラスリートは何かの間違いだと思ったが、一応聞くことにした。

そういう事を簡単に聞ける程度の中ではあるので、考えるより聞く方が早いと判断すればそうするのが効率的だからだ。

決してくだらない事に頭を使いたくない訳ではない。

「お二人はお付き合いを?　勿論上官と副官と言う意味では無く、男女の仲という意味でですよ?」

空気が固まった。

別にグラスリートは大気に慣性停止をかけて疑似時間凍結を行ったわけでは無い。

何となく、空気が固まった感があっただけだ。

空気は流動しているのに、沈黙が妙に息苦しい。

一応自己確認はしたが、別に魔法が暴走した様子も無かった。

そして時は当人達の発生により動き出した。

「いえ別にそんな烏滸がましくもガンブ様と私が――――――」

「グラスリートそれは勘違いというものだ。

別に俺はアルメリア様とどうこうという薄汚い欲望は無く――――――」

時を止めた代償か顔を真っ赤にさせて二人は似たような行動をとった。

お互いに慌てたように否定し、そして互いの否定を聞いて少し落ち込んだような表情を見せた。

「あっ…、そうですよね…」
「あ、ああ…」

もうグラスリートは沈黙するほか無かった。
笑顔を爽やかに貼り付けたまま、彼はその停止寸前の頭脳で結論を出す。
結論：どう考えてもおかしい。
こんなのは忠義の騎士ガンブ・レイドではない。
どうしてそうなる…。
研究にドハマリしたグラスリートの身近な同年代の女性と言えば、美人だが可愛くは無い従姉と、美人で可愛げが無いのが可愛いメルセデスが一番近い比較対象だった。
その他にも気合いで再生し続ける化け物のたゆんたゆん聖女とか、後に裏切って主人公の仲間に付くどころか、最初から従う気など無かったと言い放つ押しかけ弟子もいるが、それらはノーカウントだ。
このいい歳して少年のような騎士のような何かは置いておくとして、今時これ程分かりやすい反応をする女性は変態科学者のデータベースには無い。
知らない。こんな周は知らない。
それはこれまでより早くガンブと接触したからかは分からない。

そもそも今回は己も含めておかしいことだらけなのだから、この異常事態（イレギュラー）さえこの周の規定事項（レギュラー）かもしれない。

しかし、知らなくても考えなくてもこれくらいは分かる。

「もう、どうでもいいです」

こんな青臭いラブコメは無視するに限ると、後の大帝国四天王最賢の男、界曝のグラスリートは笑顔で思考を放棄した。

彼が思考を放棄した理由の大部分は呆れとかの類だが、その他にもアルメリアというグラスリートが知らない女性の存在が、ゲームシナリオから剥離した証拠に思えたからだ。

既に運命が変わり始めているという思い込みが、彼を少し浮かれさせていた。

だが、この女性の存在が、後のシナリオ通りのガンブ・レイドを作ることになる原因とは、この時点では天才科学者は想像していなかった。

元のシナリオが始まる前に、そもそもグラスリートが四天王になる前に、設定だけ存在していた女性の存在など、如何なる天才でも知りようがないのだから。

…だからこそ、このアルメリアの存在こそが運命を再びなぞる事を示していたのだ。

悪役公爵令嬢と悪役貧困聖女

後の帝国四天王となる癒しの聖女リキュア・ストラーダにとって、グラスリートは気前よく寄付してくれる好青年のスポンサーだ。

背後は色々ときな臭いようだが、孤児院に対して寄付してくれる以上、そこに踏み込む気は無い。

今冒険者の試験を最速記録で昇格し続けており、投資家としても様々な事業に手を出して、それら全てを成功させている美青年。

とはいえ、リキュアにとって異性としての興味は無い。

リキュアの心にあるのは、幼き時に相手の身分も知らずに遊び、おままごとの中でプロポーズしてくれた少年。

今では遠い存在だと知った青年。

彼の名は皇帝ヘリオス。

どこまでも真っ直ぐで、どこまでも真剣に、己の帝国の利益を追求する。

例え、彼が父から継いだ政(まつりごと)が先代以上に競争を激化させ、結果として面倒を見る孤児

達の不幸の原因になっていようと、それでもリキュアは皇帝への想いを捨てなかった。

そして本来の歴史では、主人公陣営との戦いにおいて、かつては怪我をした孤児院の子供達に使っていた治癒魔法を、己に過剰に掛け続け、幾度目かの再生の後に細胞が崩壊して自壊する。

その最後は陣営が異なる故に敵として聖女を何度も殺しつつも、聖女への感謝を捨てたわけでは無かった元孤児のヒロインの腕の中で死ぬ。

最期まで皇帝のことを案じながら…。

まあとにかく、後に帝国の聖女と呼ばれるリキュア先生には変態学者へ異性としての興味は欠片も無いのだ。

変態眼鏡の方も、聖女にはあるまじきたゆんたゆんな胸元に興味を向けるわけでは無い。

同じ巨乳でも柔らかさより張りを求める派というのもある。

具体的には豪奢な金髪で背筋の伸びたパツキュッパツな令嬢が好みのど真ん中でそれ以外はどうでも良いだけなのだが、他者から見える分には極めて紳士的な対応である。

それまでは、資金を恵んで貰う為に、厭らしい視線にも気にせぬ振りをしていたリキュアであったが、グラスリートの獣欲を感じさせない対応には品を感じていた。

唯一問題は、特定の孤児にだけやたらと気にかけること。

その相手が孤児院の子供達の中で最年長かつ飛び抜けて美しいクララベルであるとなると、やはり警戒をしてしまう。

貧富の差を問わず、男達はクララベルには甘いが、その甘さは獣欲に由来するものだ。

自身にもその類の欲望を向けられる事が多いリキュアにはよく分かる。

だが、グラスリートからはそれらの性的な滾りは感じられなかった。

「この孤児院の子供達は皆幸せでしょう？　リキュア先生に感謝しなくてはいけませんね」

「あなたは幸せです」

「リキュア先生の後を継いで先生になってみては？　環境は私が手配しますよ」

「この孤児院の中では皆苦しみも無く幸せですね」

クララベルは気が強いというか、正義感が強いというか、反骨精神の塊だった。

グラスリートのクララベルにかける言葉は、その尖った牙を砂糖で溶かすようなもの

ばかりだった。

一度「何故クララベルにだけ甘やかそうとするのですか？」とリキュアは聞いたことがある。

すると、グラスリートは言ったのだ。

「帝国の定めたものとは違う正義へと傾倒した場合、クララベルさんが皇帝を倒そうとした時、貴方はその手で討てますか？」

クララベルと、リキュアの内心を知っているかの様な物言いを爽やかに言い放つ貴公子に、リキュアはゾッとした。

何故そこで皇帝が出てくるのか、リキュアの思い出が、リキュアの想いが知られているのか。

何故他人が知るはずもないのに、クララベルが現状の帝国が肯定する『公正で不平等な世界』に不満を燻らせていると知っているのかと。

もしや対貧困層向けの秘密警察では無いかと、思わずリキュアは想定してしまったほどだ。

「クララベルさんは思い込みが強そうですし、帝国の象徴は皇帝ですから例えに使っただけですよ。信じるかどうかはお任せします」と告げる口ぶりには底が見えなかった。

眼鏡の美男子は他の子供達には公正かつ平等に与えながらも、クララベルには不平等に利益を与える。

クララベルの鋭すぎる正義感を、徹底的に溶かそうとするその在り方は、悪魔の誘惑そのものだった。

だが、第三者から見ればわかるその誘惑により、クララベルの正義感の危険性ははっきりとリキュアの知るところになった。

そして、ほんの僅かにもその堕落への誘いに効果があったように見える時、ホッとしている自分をリキュアは恥じた。

グラスリートという青年が人間に見えなくなった時、貧民街の孤児院には到底似つかわしくない令嬢が訪ねてきた。

「ここですの!? グラスリートを誑かしている女がいる孤児院というのはっ!!

…もしや、貴女かしら?」

貧民街の人々がその大きな声に反応してそちらを見ていた。

その視線は一様にして非好意的だ。

この帝国では敗者には救済は無く、勝者にのみ賞賛が与えられる。
孤児院で教えられている宗教でさえも、『神は自ら助く者だけを助く』との教義であった。
しかし、この貧民街は敗者の肥溜め。
勝者である貴族令嬢然とした女が、貧民街の救いである教会にして孤児院を悪し様に言うのは気持ちが良いものでは無い。
だが、リキュアは何となく分かったのだ。
この人は己と同じなのだと。
だから告げた。
「足繁く通っては頂いてますが、あくまで富める御方のご厚意としてで、不適切な関係ではありません」
男女の中は否定しつつ、一応スポンサーの顔も立てる。
それに適した言葉を言ったはずなのだが――――
「嘘ね。彼がそんな聖人であるわけがありませんわ」
バッサリと切られた。
「あったとして、青田買い出来そうな部下候補がいるとか、人体実験の候補者を探しに来

たとかそんなところでしょう？」
あんまりと言えばあんまりだが、グラスリートがこれまでの周でやって来たことは、まさにそれだった。
しかも部下と言っても、枕詞として使い捨てのが付く。
「オフステインさんはその様な方では…」
信用は出来ても、信頼は絶対に出来そうに無いスポンサーではあるが、一応スポンサー様ではあるのでリキュアは変態眼鏡を立てる。
「あら、恋は盲目というものかしら？　理解が浅いようね」
リキュアはその言葉をそのまま返したかったが、相手も名のある貴族令嬢であり、敵に回すのは不味いと考えた。
「浅学の身でして、観察眼もありません。
ですが、誓ってオフステインさんには異性としての興味があるわけではないのです。
信じて貰えませんか？」
内心、面倒だなとは思っても、そこは真摯な顔でリキュアは対応した。
「…良いでしょう。

仮に張り合ったとして負けるとも思えませんもの。
大人げない対応でしたわ。
私、メルセデス・フォーミュラと申しますの。
貴女、お名前は？」
真摯な表情の仮面が外れそうになるほど、リキュアはげんなりしていたが、それでも愛想笑い程度は出来た。
出来た筈だ。
相手が帝国最大の公爵家の娘という驚きで、上手く愛想笑いが出来ていたかどうかも分からないが。

その後、グラスリート関連の話で無ければ、極めて公正な相手だとリキュアは知ることになった。
優秀な子供は未来の帝国の宝だと、援助を申し出てくれた。
試験の成績如何ではという条件付きではあったが。
…優秀で無い子供についてはバッサリと切り捨てる点についても、極めて公正だった。
優秀な子供は、この国最大の貴族が助けてくれるのなら、優秀で無い子供は自分が救

おう。

聖女はそう誓い、冒険者としての登録をした。

――これはこれまでの周回通りの、四天王の女性二人の出会いである。

この時点ではまだ、エンディングに繋がるシナリオに歪みは起きていない。